

# 熊本県下益城郡砥用町方言の

## 程度副詞語彙の構造

——数量関係の副詞語彙を中心にして——

井 上 博 文

### はじめに

方言生活の中で人々はさまざまな言語形式を駆使して、外界の数量を認識、表現し分けている。その一つに数量関係の副詞語彙がある。次の文例のソーヨ（全部）、ヨソニョ（たくさん）の類である。

○ニモツァ ソーヨ モツテ キタ。（老女）

荷物は全部持って来た。

○アラー コケニャ ヨソニョ ナツリマス ナー。ナスビノ。（老男）

あら、ここにはたくさん生っていますね。茄子が。

いま、＜数量程度にかかわる＞という語義的意義特徴（以下、単に語義的特徴と記す）と＜副詞＞という文法的意義特徴とが交差するところに統合される一群の語詞を、数量関係の副詞語彙と定義する。この数量関係の副詞語彙は、程度副詞を構成する下位の意味分野である。数量関係の副詞語彙に所属する語詞は基本的に動詞、なかでも存在詞によって構成される述部を限定・修飾する。

副詞・副詞語彙についての研究は、その定義、職能、機能、分類にわたって数多くなされているものの、方言副詞語彙を取り上げたものは少なく、その体系性ならびに地域性の解明が必要とされる。また、方言語彙の研究のうえで重要な位置を占める九州方言についての、語彙論的、意味論的観点からの討究は未だ希薄な現状である。

本稿は、熊本県下益城郡砥用町方言の数量関係の副詞語彙の語彙構造の究明を目的とする。その為には、意味的側面と形態的側面からの分析が基本とされることは言うまでもない。調査地点の下益城郡砥用町は中心都市の熊本市より東南へ40km離れた山あいの農業集落である。この砥用町方言は熊本県方言を代表する北部中部方言に属する。

取り扱った資料は、昭和58年8月14日～8月17日、昭和59年8月14日～8月16日の延べ7日間の調査資料に基づくものである。調査は予め用意した調査簿（約400語を収録）による質問調査を中心に、自然傍受法で補いを施した。インフォーマントは10名（83女・83女・72男・65男・56男・52女・46男・44女・17女・16男）である。

### 一、数量関係の副詞語彙の意味構造の枠組

調査によって得ることができた数量関係の副詞語彙は168語である。この内部はいかなる数量概念をあらわすかによって、次下の五つの意味分野に分けることができる。<sup>注2</sup>

- (1) <数量の全>をあらわす意味分野 (38語) (22.6%)
- (2) <数量の多>をあらわす意味分野 (84語) (50.0%)
- (3) <数量の適当>をあらわす意味分野 (7語) (4.2%)
- (4) <数量の少>をあらわす意味分野 (23語) (13.7%)
- (5) <数量の無>をあらわす意味分野 (16語) (9.5%)

それぞれの意味分野に所属している一々の語詞を語義的特徴、形態的特徴の観点から分析を行って得ることができた諸特徴によって、五つの意味分野の内部を、さらに下位の意味分野に分節することができる。分節する際に帰納した弁別基準を意味分野ごとに示す。

(1) <数量の全>をあらわす意味分野

- ①全体を異質な個の集合とみなすものか、全体を一とみなすものか。
- ②存在性が強く認められるか否か。(形態素「アル」を含んでいるか。)
- ③特定の意味をもつ述部と共起する傾向が認められるか否か。
- ④係助詞「ワ」を下接できるか否か。

(2) <数量の多>をあらわす意味分野

- ①<全>を前提とするものか否か。
- ②比況的にあらわすものか、直截的にあらわすものか。(形態素「シコ・ゴテ」を含んでいるか。)
- ③不定量をあらわすものか、特定量をあらわすものか。(形態素として不定詞を含んでいるか。)
- ④情態性の強く認められるものか否か。
- ⑤状態程度にも用いることができるか否か。(形容詞を限定・修飾できるか否か。)
- ⑥「存在表示」に強くかかわるものか否か。(係助詞「ワ」を下接できるか否か。)

(3) <数量の適当>をあらわす意味分野

- ①程度性に強くかかわるものか。
- ②情態性に強くかかわるものか。(「チョード」と同一の文中に共起できるか否か。)

(4) <数量の少>をあらわす意味分野

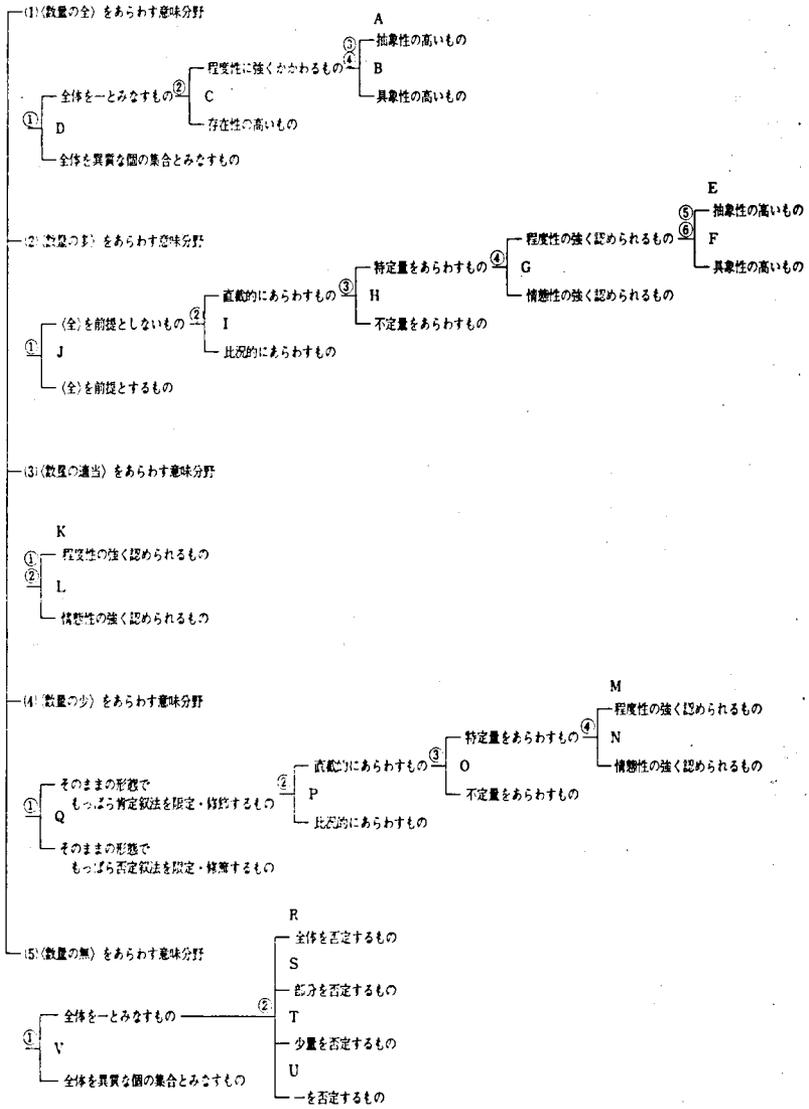
- ①もっぱら肯定叙法を限定・修飾するか否定叙法を限定・修飾するか。
- ②比況的にあらわすものか、直截的にあらわすものか。(形態素「シコ・ゴテ」を含んでいるか。)
- ③不定量をあらわすものか、特定量をあらわすものか。(形態素として不定詞を含んでいるか。)
- ④情態性の強く認められるものか否か。

(5) <数量の無>をあらわす意味分野

- ①全体を異質な個の集合とみなすものか、全体を一とみなすものか。
- ②全体、部分、少量、一のいずれを否定するものか。

意味分野によって、弁別基準の数に多寡がある。これは、意味構造の複雑、簡素の反映である。以上の弁別基準によって、表1のように意味構造の枠組を帰納・設定することができる。これらの弁別基準は、それによって弁別された語群については、逆に統合基準と

表 1



して機能する。ただし、表1に示した分類枠が唯一のものではなく、どの弁別基準に重きを置くかによって組み替えられる可能性はある。これは、副詞語彙の体系が包摂・被包摂関係によらないゆるやかな体系であることを物語っている。

## 二. 語詞の記述

一で見たように数量関係の副詞語彙の内部は、語義的、形態的特徴によってAからVまでの下位の意味分野に分節される。これにしたがって、下位の意味分野ごとに語詞の記述を行う。同一の意味分野に所属している語詞はお互いに語義的特徴の大部分を共有し、語義が酷似している。それ故に、語詞相互の差異を見出して行くことはかなり難しい。したがって対立をなすと考えられる語詞の間に認められる弁別の特徴を帰納する為には、語義的観点、形態的観点の他に文体的・位相的観点を加えての検討が必要である。文体的・位相的観点として取り上げたものは使用年層、使用頻度、土地言葉・共通語の意識の有無、新古の意識、品位である。以下、すべての語詞に文例を示すべきであるが、重要と思われるものに限った。尚、文体的・位相的特徴は次のように略した。

- |                    |                   |                |
|--------------------|-------------------|----------------|
| a. 使用年層            | b. 使用頻度           | c. 土地言葉・共通語の意識 |
| 全年層 → 全            | 盛ん→盛              | 土地言葉の意識のあるもの→土 |
| 主として老年層→老          | 普通→普              | 共通語の意識のあるもの →共 |
| 中年層以上 →中以上         | 劣勢→劣              |                |
| 主として中年層→中          | 稀 →稀              |                |
| 中年層以下 →中以下         |                   |                |
| 主として青年層→青          |                   |                |
| d. 品位              | e. 新古の意識          |                |
| 上品な言葉という意識のあるもの→上品 | 新しい言葉という意識のあるもの→新 |                |
| 下品な言葉という意識のあるもの→下品 | 古い言葉という意識のあるもの →古 |                |

(1)<数量の全>をあらわす意味分野 (38語)

<1>抽象性の高いもの (7語)

- 1.ゼンブ (全・盛) 2.ジェンブ (老・劣) 3.ソーヨ (中以上・普・土・やや上品)  
 4.ミンナ (全・普・やや上品) 5.ミナ (中以上・劣・土) 6.イツソ (人の数に用いる・全・普・青以下では劣・土) 7.スベテ (全・稀・共)

○オルゲニャ イツソトメ オラス バイタ。アサカル アメ フッタケン。(老男)  
 私の家にはみんなおられるよ。朝から雨が降ったから。

<2>具象性の高いもの (20語)

- 8.ゴロット (全・普・やや下品・土) 9.ゴソット (老・稀) 10.ゴッソリ (老・稀・ゴソットに比べると共通語的) 11.コロット (全・中以上・劣・土) 12.ヒョロット (中以上・劣・土) 13.ヒョロリ (中・劣・土) 14.スッペリ (中以上・劣・土)  
 15.ネコソギ (中以上・劣) 16.ネーカリハーカリ (中以上・劣) 17.ネカラハカテ (老・稀) 18.ヤザイガッサイ (家の中の道具について用いることが多い・老・稀)

19. ヨート (完全に・中以上・劣・土) 20. ユート (完全に・中以上・劣・土) 21. ウツクシュー (完全に・中以上・劣・土) 22. キレーニ (完全に・全・劣・共) 23. スックカリ (完全に・中以下・普・共) 24. カタカル (片端から・中以上・劣・土) 25. カタカリ (片端から・老・稀・土) 26. カタッパシ (片端から・中以上・普) 27. カタッパシカル (片端から・中以上・劣)

○イモチノ キャーイッタダスケン スッペリ ヤラレタツデス バイ。(中女)  
いもち病が入りましたから、一つ残らずやられましたよ。

○クッセタ ハミヤー ウツクシュー クテシモトル バナー。(中男)  
食わせた餌は全部食ってしまっているよ。

<3>存在性の高いもの(5語)

28. アルシコ (全・盛・土) 29. アッダケ (全・普・共) 30. アルダケ (全・稀・共) 31. アルカギリ (全・稀・共) 32. アリッタケ (青・稀・共)

○フシンシタ ノコンノ ツンデ アッタロ ガ。アッパ アルシコ モッテ キトケ。(中男)

普請した残りが積んであっただろう。あれをあるだけ持って来ておけ。

<4>全体を異質な個の集合とみなすもの(6語)

33. ナンデン (全・盛) 34. ナンデモ (青・劣・共) 35. ナンデンカンデン (全・劣・土・やや下品) 36. ナンデモカンデモ (全・劣・共) 37. ナンモカンモ (全・劣・やや上品) 38. ナンモカン (全・劣)

○ナンデン クイコボスケン アリヤツガ イッピヤー アガットツ タイ。(中女)  
何でも食いてばすから蟻のやつが(部屋に)上がっているよ。

(2)<数量の多>をあらわす意味分野(84語)

<1>抽象性の高いもの(21語)

39. エライ (全・盛・土) 40. ソーニャ (全・盛・土) 41. ソーン (中以上・劣・土) 42. タイギャニャ (全・盛・土) 43. タイギヤー (全・普・土) 44. タイヤー (青・普・土) 45. イサギュー (中以上・劣・土) 46. イサギ (中以上・劣) 47. ヒドー (中・劣) 48. ムゴー (中以上・劣・土) 49. ヨー (中以上・劣) 50. ユー (青・劣) 51. シゴク (老・稀・古) 52. スゴク (青・稀・共) 53. モノスゴク (全・稀・共) 54. モノスゴー (中以下・稀・共) 55. ズイブン (全・稀・共) 56. ソートー (全・稀・共) 57. トツケムニヤー (思いもかけない・中以上・劣・土) 58. カンガムニヤー (常識を外れて・中以上・劣・土) 59. オソロシュー (恐ろしいほど・中以上・劣・土)

○ムゴー アンタゲンタ アッタ ナー。(老男)

大層、あなたの家のはあったね。

<2>具象性の高いもの(29語)

60. イッピャ (ある空間を満たす・全・盛・土) 61. イッパイ (全・女性・普・共) 62. ホイッピャ (限界まで・中以上・劣) 63. ハライッピャ (限界まで・全・普・) 64. ヨンニョ (比較に用いることが出来る・全・普・古・土) 65. ユンニユ (比較に用いることが出来る・中以上・劣・土・古) 66. コーンコ (子供に対して用いる・中以上・劣・土・古)

- 上・劣・土) 67. エライコ (中以上・劣) 68. ホーラツ (常識とされる基準を越えて・中以上・普・土) 69. ウント (命令表現と共起し易い・全・劣) 70. ヨケー (余分に・中以上・劣) 71. ヨケイニ (余分に・全・稀・共) 72. タップリ (十分に・全・稀・共) 73. タクサン (全・稀・共) 74. タイソー (全・稀・やや上品) 75. オモサン (思う存分・中以上・劣・土) 76. ホッポー (常識の数量程度を外れる・中以上・普・土) 77. ホクソ (常識の数量程度を外れる・中以上・普・土) 78. ホラクソ (常識の数量程度を外れる・中以上・稀・土・やや下品) 79. キンナシ (際限なく・老・劣・土) 80. ヤータラ (思慮分別なく・中以上・普) 81. ヤタリヤ (思慮分別なく・中以上・普) 82. ヤタリヤクッタリヤ (思慮分別なく・中以上・劣) 83. ヤタラグッチヤン (思慮分別なく・老・稀) 84. ヤルバナシ (とどめもなく・中以上・劣・土) 85. ヤリバナシ (とどめもなく・中以上・劣・土) 86. ヤリッパナシ (とどめもなく・青・劣) 87. ヤルバンギュー (とどめもなく・劣・土) 88. ヤルバンビューン (とどめもなく・中・稀・土)

○エンリョセンデ ヨーソコ モラウ タイ。(老男)

遠慮しないで、たくさん貰いなさいよ。

○カワニヤ ミズノ ホーッポ デタ ナ。ヤマニヤ ホクソ フッタツ ダロ。

(中女)

川に水がたくさん出たね。山には(雨が)たくさん降ったのだろう。

### <3>情態性の強く認められるもの(9語)

89. イッピャコッピャ (広がりの中で・中以上・普・土) 90. グッサリ (量感を伴う・中以上・劣) 91. ドッサリ (量感を伴う・全・劣・共) 92. ベツタリ (すきまなく・中以上・劣・土) 93. ベツシャリ (すきまなく・中・劣・土) 94. ビツタリ (すきまなく・中以上・劣・土) 95. ビツシャリ (すきまなく・中・劣・土) 96. ピツシャリ (すきまなく・老・稀・土) 97. ガンブリ (液体に用いてこぼれるほど・中以上・劣・土)

○ピーマンニヤ フームシノ ベツタリ チートル。(中女)

ピーマンにはフー虫がすきまなくたくさん付いている。

○ガンブリ チージ ノミキラン ゾ。(老男)

こぼれるほどたくさん注いで飲めないよ。

### <4>不定量をあらわすもの(4語)

98. ドシコデン (全・盛・土) 99. ドシコデモ (全・稀・やや上品) 100. イクラデン (全・劣) 101. イクラデモ (青・女性・劣・やや上品)

### <5>比況的にあらわすもの(16語)

102. クサルシコ (腐るほど・全・劣) 103. エーシコ (自分で設けた基準に見あうだけ・中以上・劣・土) 104. ヨカシコ (自分で設けた基準に見あうだけ・全・普・土) 105. エライシコ (中以上・劣・土) 106. タマガルシコ (驚くほど・中以上・劣) 107. カンガムニャー (常識を外れて・中以上・劣) 108. ヤマンゴテ (山のように・全・劣)

- 109.クサルゴテ (腐るほど・全・劣) 110.バジグルゴテ (ひっくり返すほど・中以上・劣・土) 111.バッチャガガスゴテ (ひっくり返すほど・中以上・劣・土) 112.バッチラカスゴテ (散らかすほど・中以上・劣・土) 113.イナイキランゴテ (担えないほど・中以上・劣・土) 114.タマガルゴテ (驚くほど・全・劣) 115.ノサンゴテ (嫌になるほど・中以上・劣・土) 116.アクシャウツゴテ (嫌になるほど・中以上・劣・土) 117.キショクワルナルゴテ (気持ちが悪くなるほど・中以上・土)

○シクダイバ タマガルシコ ダサシタ。(青男)

宿題を驚くほど出された。

○アクシャウツゴテ ツレチ ナー。モッテ モドロテニヤ ヤオイカランダッタ  
バナー。(中男)

嫌になるほど釣れてね。持って帰るにもたいへんだったよ。

<6><全>を前提とするもの(5語)

- 118.ジャープン (中以上・普・土) 119.ダイブン (全・劣・共) 120.ダイタイ (全・普) 121.タイガイ (全・普・共) 122.ホトンド (全・劣・共)

(3)<数量の適当>をあらわす意味分野(7語)

<1>程度性の強く認められるもの(1語)

- 123.チョード (全・盛)

<2>情態性の強く認められるもの(6語)

- 124.ガツリ (中以上・劣・土・古) 125.ピシャット (中以上・劣・土) 126.ピツ  
タシ (中以下・劣・新) 127.チョッキリ (全・稀) 128.キツチリ (全・稀・共)  
129.カッター (確実に・中以上・劣・土)

○マタヤツガ チョード ガツリ アッタ。(中女)

豆がちょうどぴったりあった。

○イールシコ カッター アッタケン ヨカッター。(中女)

必要なちょうどあったからよかった。

(4)<数量の少>をあらわす意味分野(23語)

<1>程度性の強く認められるもの(11語)

- 130.チット (全・盛・土) 131.チビット (全・劣・やや下品) 132.チョビット (全・劣・やや下品) 133.チョボット (中・劣) 134.チョコット (全・普・共・やや上品) 135.チョット (全・普・共・やや上品) 136.スコシ (全・普・共・やや上品) 137.シ  
ョーショ (全・稀・共) 138.タショー (全・稀・共) 139.チットヤソット (中以上  
・稀) 140.ココロモチ (中以上・劣・やや上品)

○チーット ノコットル。モッテ イキナハリ。(中女)

少し残っている。持っておきなさい。

<2>情態性の強く認められるもの(2語)

- 141.チローチロ (液体の流れることに用いる・中以上・劣) 142.チヨボチヨボ

(雨の降ることに用いる・中以上・劣)

○アメン チョロー<sup>ウ</sup>チョロワ フリヨルバッテン ヌレヤ センド。(中男)

雨が少しは降っているけれども濡れはしないだろう。

<3>不定量をあらわすもの(1語)

143.イクラカ(全・稀・共)

<4>比況的にあらわすもの(2語)

144.ハナクソンシコ(鼻糞ほど・全・劣・下品) 145.シルシアルゴテ(目印に・中以上・劣・土)

○コスタクレダイケン ハナクソンシコシカ ヤラッサン モン。(中男)

けちだから少ししかくれないんだもの。

<5>そのままの形態でもっぱら否定叙法を限定・修飾するもの(7語)

146.アンマリ(全・盛) 147.アンマル(全・普) 148.アンマ(全・普) 149.アマ  
リ(全・稀・共) 150.エラヤー(中以上・普・土) 151.タイシテ(全・劣・共)

152.シカーツ(中以上・劣・土)

○ソギャー エラヤー ナカッタ。オモゴツァ ナカ。(中女)

そんなにたくさんは無かった。思うようには無い。

(5)<数量の無>をあらわす意味分野(16語)

<1>全体を否定するもの(5語)

153.ゼンゼン(全・普) 154.ジェンジェン(中以上・老・劣・土) 155.トント(老・  
稀) 156.イッコ(中以上・劣・土) 157.マルッキリ(青・稀・共)

<2>部分を否定するもの(1語)

158.ダーイタイ(中以上・普・土)

<3>少量を否定するもの(3語)

159.チットン(中以上・劣・やや下品) 160.チットモ(全・稀・共・上品) 161.ス  
コシモ(全・劣・共・やや上品)

<4>一を否定するもの(4語)

162.イッチョン(全・盛・土・やや下品) 163.イッチョデン(全・劣・土・下品)

164.イッチョモ(全・稀) 165.ヒトツモ(全・稀・共・上品)

○フク カイヤ イタバッテン イッチョデン アウタァ ナカッタ。(中女)

服を買いに行ったけど、一つも合うのは無かった。

<5>全体を異質な個の集合とみなすもの(3語)

166.ナーン(中以上・普・土) 167.ナンモ(全・盛・土) 168.ナニモ(全・稀)

### 三. 意味構造

以上、一々の語詞について記述した。以下には、三つの意味分野を取り上げて、より下位の意味的内部構造について検討してみたい。

1. <数量の全>をあらわす意味分野の中で、具象性の高いものと抽象性の高いものとを弁別する特徴は、具象性の高いものが係助詞「ワ」を下接できないことと、具体的な動

作・行為を表わす動詞と共起する傾向が認められることである。また、具象性の高いものは、その述部が完了態を取り易いということが指摘される。

○ナ<sup>ン</sup>モカ<sup>ン</sup>モ アヤツガ ゴ<sup>ロ</sup>ット モッテハッテ<sup>タ</sup>。(中女)

何もかもあいつが持って行った。

○クロナッテカル ゴソット ヒーチハッテ<sup>タ</sup> モン。(老女)

(畑の大根を)暗くなってから一つ残らず持って行ったもの。

このように述部が完了態を取り易いことは、具象性の高いものが、生起した事態の状態に注目し、その状態に密接にかかわっているからと考えられる。どのような状態であるかという点から、内部を次のように四つに分けることができよう。(1)一つ残らず(8~15)、(2)関係するものすべて(16~18)、(3)状態が完全(19~23)、(4)次々に(24~27)

このうち<一つ残らず>という意義特徴を持つものは概して悪い事態について用いることが多い。

2. <数量の多>をあらわす意味分野の抽象性の高いものに所属している語詞は21語である。使用頻度・使用層の広がり・土地言葉としての意識からこの意味分野の基本語と考えられるエライ、タイギヤニャ、ソーニャの三語を取り上げる。この三語は数量程度にかかわることができるのと同時に、形容詞を限定・修飾することが可能であって状態程度にかかわる用法も合わせ持っている。その意味では数量概念が固定化しているというよりも、程度性により強くかかわっているといえよう。

○エ<sup>ラ</sup>ーイ コトシャ ウメノ アッタ <sup>ナ</sup>。アンタモ ツケチ <sup>ミン</sup> ナ。(中女)

大層今年は梅があったね。あなたも漬けてみないかい。

○ソーニャ ア<sup>ッ</sup>ゴ<sup>タ</sup>ッデスバッテン ソ<sup>ギ</sup>ヤニャ ナ<sup>カ</sup>ッデス <sup>バイ</sup>。(老男)

大層あるようですが、そんなにないんです。

○オルギヤ<sup>ン</sup> コ<sup>メ</sup>ワ デケトランゴ<sup>タ</sup>ッバ<sup>ッ</sup>ッテン <sup>タ</sup>ーイギヤニャ <sup>タ</sup>マ<sup>マ</sup>ッタ。

(中女)

私の家の米はできていないようだったけれども、大層たまった。

三つの文例に於いて相互に置き換えることができる。語義特徴がほとんど重なっているのである。しかし、次の文例のソーニャはエライと置き換えると、やや不自然な言い方となる。

○サガケンカル <sup>ソ</sup>ーニャ クスリ イレトル <sup>バナ</sup>。(老女)

佐賀県から大層薬を入れているよ。

○<sup>ソ</sup>ーニャ <sup>カン</sup> クイ<sup>ジャ</sup>ー<sup>タ</sup>ロー。(青女)

大層蚊が食い出したろう。

二例とも客観的な事実について叙述したものである。状態程度にかかわる例であるが、

○アンタ エ<sup>ラ</sup>ーイ フト<sup>ッ</sup>タ <sup>ネ</sup>ー。(中女)

あなた大層大きくなったね。

エライはソーニャと置き換えることができる。だが、ソーニャとなるとニュアンスが異なってくる。ソーニャは、冷静な判断に基づく表現になるが、エライは驚き・揶揄などの感情を伴う表出となりがちである。これはソーニャが何らかの基準をもとにして「大きな

った」と客観的に判断するのに対して、エライは「大きくなった」そのこと自体に自己の感慨を表出しているからと考えられる。エライは主観的と言えるだろう。エライが文頭に位置することが多いことも、この語が生じた事態に対しての主観的な評価を示すことの現われであると思われる。

タイギヤニャはソーニャに近い。次の文例でソーニャに置き換えても良いが、エライとなるとやや不自然な言い方となる。

○タイギヤニャ センセイタチモ セワヤカシタツダロ。(老女)

大層先生たちも心配なさったのだろう。

○ツウウチニャ タイギヤニャ アメン フリマシタ。(中男)

梅雨の間は大層雨が降りました。

タイギヤニャとソーニャの語義特徴の差異を見出すことは難しいが、程度性の点からみるとタイギヤニャの方が程度が大である。以上のような三語の差異はそれぞれの出自の違いによるものかも知れない。すなわち、エライは形容詞、ソーニャは指示代名詞、タイギヤニャは「大概」という名詞である。

エライと同様の働きをするものとしてはイサギュー、イサギ、ムゴー、ヒドー、ヨー、ユー、トツケムニャー、カンガムニャー、オソロシューなどがある。いずれも形容詞出自である。このうちヨー、ユーはほめる意識を伴いやすいのに対して他の語詞はけなす意識を伴いやすい。そして、後者の語数が多いことが注目される。

3. <数量の多>をあらゆる意味分野の具象性の高いもの28語のうち、イッピャ、ヨンニョ、ホーラツの三語が基本語であると思われる。まず、ヨンニョは比較概念を持つ点で他の二語と弁別される。

○ワツガツガ ヨンニョ ウーカゴタツ。(老女)

お前のがよけい多いようだ。

○コトシャ ヨンニョ サンカゴタツ ナー。(中男)

今年はよけいに寒いようだね。

この文例のヨンニョはイッピャ、ホーラツと置き換えることはできない。程度性の点からみるとホーラツが最も数量程度が大きく、常識とされる基準を越えて、かえって迷惑する数量であることが多い。

○ホーラツ ウンテライタ。ミズバ タタミン ウエ。(中女)

たくさんこぼした。水を畳の上に。

ホーラツは「ホーラツカ」と形容詞として用いられることもある。イッピャはある空間を満たしている数量について用いることが多い。

○ホー カキノ イッピャ ナツトル ナー。(老男)

ほう柿がいっぱい生っているね。

この場合、柿の木の全体にわたって実があることが必要であり、柿の木の一部にまとまって実が多くある時はヨンニョを用いる。また、イッピャはコップなどの容器に液体が入っている場合には容量の限界まで入っているのが普通である。すなわち、イッピャはある空間の全体を占めて数量が多い場合に用いると言えよう。このことはイッピャがハライッピ

表2

意味分野	語彙量	比率
<数量の全>をあらわす意味分野	38	22.6%
抽象性の高いもの	7	4.2%
具象性の高いもの	20	11.9%
存在性の大きいもの	5	3.0%
全体を異質な個の集合とみなすもの	6	3.6%
<数量の多>をあらわす意味分野	84	50.0%
抽象性の高いもの	21	12.5%
具象性の高いもの	29	17.3%
情態性の強く認められるもの	9	5.4%
不定量をあらわすもの	4	2.4%
比況的にあらわすもの	16	9.5%
<全>を前提とするもの	5	3.0%
<数量の適当>をあらわす意味分野	7	4.2%
程度性の強く認められるもの	1	0.6%
情態性の強く認められるもの	6	3.6%
<数量の少>をあらわす意味分野	23	13.7%
程度性の強く認められるもの	11	6.5%
情態性の強く認められるもの	2	1.2%
不定量をあらわすもの	1	0.6%
比況的にあらわすもの	2	1.2%
そのままの形態でもっぱら 否定叙法を限定・修飾するもの	7	4.2%
<数量の無>をあらわす意味分野	16	9.5%
全体を否定するもの	5	3.0%
部分を否定するもの	1	0.6%
少量を否定するもの	3	1.8%
一を否定するもの	4	2.4%
全体を異質な個の集合とみなすもの	3	1.8%
総語彙量	168	

ゃ、ホイッピーという派生語を生んでいることから押し量ることができる。

具象性の高いもののうち三語に限って考察したが、以上みてきたようにこの意味分野は、それぞれが当該方言人に共有される特定の喚情的意味合いを伴う語義特徴をもって対立をなしている。

#### 四. 量的構造

意味分野ごとに語彙量を示したものが表2である。量的に全体が均一ではなく、特定の意味分野への量的な傾斜がみられる。<数量の全><数量の多>という数量程度が大である意味分野の語彙量が豊かであるのに対して、<数量の適当><数量の少><数量の無>という数量程度が小である意味分野では少ない。この事実は、山陰、瀬戸内海域方言でも同様に指摘されている一般的な傾向である。<sup>注3</sup>さらに細かく見てみると、同じ意味分野の中

に於いても量的傾斜が見られる。〈数量の全〉〈数量の多〉では、具象性の高いものである。方言生活では数量を程度性の別に基づいて、その結果を把握し表現するのではなく、何らかの自分とのかかわりでもって捉え表現し分けているといえるのではなからうか。このことは、語彙量の多い意味分野ほど構造も複雑であることと並行している。

また、〈数量の多〉をあらゆる意味分野の抽象性の高いもの、具象性の高いもの、比況的にあらゆるものの中で、けなす意識を伴い易いものが多く認められる。ここにも外界の数量を単に数量としてではなく、人間の行為に対する主体的な判断と絡み合わせて捉え表現し分けていることが分かる。

## 五. 語構造

語構造について、語構成と語種の観点から見てみる。

### 1. 語構成

- (1)単一型 (115語) [ゼンブ ゴロット エライ チョード チット……]
- (2)反復型 (12語) [ネカラハカラ ナンデンカンデン ヤタラクタリヤ……]
- (3)複合型 (41語)
  - a. 「ゴテ」を下接するもの (11語) [ヤマンガテ タマガルゴテ……]
  - b. 「デン(デモ)」を下接するもの (9語) [ナンデン ドシコデン……]
  - c. 「ン(モ)」を下接するもの (8語) [チットン イッチョン ナンモ……]
  - d. 「シコ」を下接するもの (8語) [アルシコ クサルシコ ヨカシコ……]
  - e. 「ダケ」を下接するもの (2語) [アッダケ アルダケ]
  - f. 「カ」を下接するもの (1語) [イクラカ]
  - g. 接頭辞を含むもの (2語) [ホイッピー ハライッピー]

### 2. 語種

単一型を語種の観点からみると次の三つに分けることができる。(判断に迷うものは除いた。)

- (1)漢語出自のもの (30語) [ゼンブ タイギャー ショーショ……]
- (2)和語出自のもの (41語) [ミンナ ソーニャ オモサン アンマリ……]
- (3)オノマトペ出自のもの (39語) [スッペリ ベツタリ ガツツリ チット……]

複雑な意味構造を支える語構造もそれと同様に単純ではない。もともと副詞であったものから、名詞・形容詞の連用形・動詞からの転成、助詞、助動詞を基に形成されたものなど多岐にわたっている。方言副詞語彙としてはオノマトペ出自の語詞の比率が高いことが特徴としてあげられる。このことと並行して「シコ」「ゴテ」を下接する比況的にあらゆるものが多いことも注目される。いわゆる共通語に対して、数量をより具象的に把握し表現するという態度がそこに見られるのである。

### おわりに—今後の課題—

以上、熊本方言の一地点に於ける程度副詞語彙の、一下位意味分野である数量関係の副詞語彙の構造について考察を加えた。方言副詞語彙の実態の解明の為に、他の意味分野での細かな調査を行い、分析方法を整備しなければならない。今後の課題としては、個人

差、性差、世代差を明らかにすることとともに、以下に記した問題を考えている。

1. 副詞語彙の地域性の問題 語形、意味・用法、体系の地域性を中心に掘えながら、狭域、広域の両面から討究する。
2. 修飾発想の問題 数量を捉え表現し分ける為に、意味構造、量的構造、語構造にわたって、複雑な構造を示していた。このように修飾話部に立つものの構造と、その意味について他の副詞語彙、形容詞・形容動詞も加えて、修飾発想の観点から討究する。
3. 国語史上の問題 共通語の形容詞「美しい」の連用形「ウツクシク」に相当するウツクシューは、当該方言では<数量の多>をも意味する。このウツクシューの詞副としての用法は日葡辞書にもみられる。また、<数量の多>に所属するホーラツは、もともと名詞「放埒」である。この語は『邦訳日葡辞書』によれば、放縦、無遠慮といった人の性格を表わす語である。どのような語が数量関係の副詞語彙となっていったか。

## 注

- (1)主なものとして、a. 広島大学方言研究会編『方言研究年報 9巻』(1966)、b. 室山敏昭『方言副詞語彙の基礎的研究』(たたら書房 1976)、c. 『瀬戸内海城方言の副詞語彙の研究』(内海文化研究紀要 第4号 1796)などがある。
- (2)久木田恵「大阪府豊能勢郡能勢町地黄方言の程度副詞語彙——『数量程度をあらわすもの』を中心にして——」(『国文学攷』83 1979)を参考にさせていただいた。本稿では、久木田氏が「全をあらわすもの」とされたものを、<数量の全>と<数量の無>に分けた。
- (3)注(1)で示したb. cのもの。
- (4)愛宕八郎康隆「奥能登珠洲方言の程度副詞」(注(1)a所収)では、「強意態グループ」のなかに、「ウツクシー」に「すっかり」の共通語訳が当てられている。

〔付記〕本稿は、修士論文の一部を改稿したものである。成稿にあたっては小林芳規、室山敏昭両先生より懇切な御指導を賜わった。また、インフォーマントの方々には快く調査に応じて下さった。記して、厚く御礼申し上げる。

——広島大学大学院博士課程後期在学——